

## 舞踊「月夜浜節」と「かしかき」

犬飼 公之

### 月夜浜節

月夜浜<sup>つきよばま</sup>だきぬ 「ヨーンゾ」 岸ぬ浦<sup>ら</sup>ぬ木綿<sup>もみん</sup> 「ヒヤスリ」

木綿花<sup>ちく</sup>作<sup>つく</sup>てい 木綿かしかきら

月夜の浜のような岸の浦（地名）の木綿。木綿を作って木綿の縵<sup>もみん</sup>をかけよう。

くり返し 返し 「ヨーンゾ」 指<sup>うぶはつ</sup>弾<sup>は</sup>き見上<sup>み</sup>ざりば 「ヒヤス

リ」 筋持<sup>ぢんぢ</sup>ついでぬ美<sup>ちゆ</sup>らさ 読み美<sup>ちゆ</sup>らさあむぬ 「ヒヤスリ」

くり返しくり返し指で弾いて見上げると、糸筋も美しくよ

みも美しい。

吹かば飛<sup>てい</sup>ぶ手巾<sup>てんぎん</sup> しゆてい待ちゆら 「ヨンナ」

吹かば飛<sup>てい</sup>ぶ手巾<sup>てんぎん</sup>だけれど、仕上げて待ちましょう。

1

石垣島平得村に伝わる「月夜浜節」は「木綿花作てい 木綿かしかきら」とうたわれ、はじめに木綿花を持って踊り、次いで左手に「かし」（杵・かせ）、右手に「わく」を持ち、最後に手巾（ティサジ）を持って踊る。

まず「かせ」（かし）と「わく」に目を向けよう。「かせ」

（杵）は紡いだ糸を掛けて巻く木で作った工字型の道具。女はそれに糸をくり返し巻きつけ、思いをつのらせながら恋しい人

の訪れを待ち続けるというのである。

「かせ」（かし）はそのように糸を巻き掛ける道具であるが、そのみならず巻いた紡糸（つみいと・縵）をもいい、また、機に掛ける経（たていと）のこともいったとみられる（かせいと）。

「かせ」の歴史は長い。万葉歌にも「久邇の新京を讃<sup>ほ</sup>むる」

一連の歌々（6-1050-1058 田辺福麻呂）のなかに、

娘子<sup>むすめ</sup>らがうみをかくといふ鹿背<sup>かかせ</sup>の山時<sup>ととき</sup>し行<sup>ゆ</sup>ければ都となりぬ（6-1056）

おとめたちが績麻をかけるという杵ではないが、鹿背の山は時が移って、今や都となったことだ。

とうたわれている。

「うみを」（績麻）というのは麻やからむし（苧麻）などの織維を紡いで糸にしたもの。おとめたちはその糸を「かせ」にかける。この万葉歌はそれを「鹿背の山」に掛けてうたっているのである。そのように「かせ」（かし）は万葉の時代から使われていた。<sup>（注1）</sup>

万葉歌をみると麻やからむしの栽培から糸を紡ぎ、布に織る工程のすべては女たちの仕事であった。それ以後の時代にもそのようであったとみられる。「かせ」（かし）が女歌にうたわれ、女踊に使われることの淵源はここに求めることができよう。

「わく」も糸を巻きとる道具。「わく」は「杵」「簍」などさまざまに表記されるが、正字は「簍」。『大漢和辞典』はこれを

「いとわく」であるといい「簞」に同じという。そして『説文解字』を引いて「糸をまきつける具」であるという。<sup>(注2)</sup>

「わく」は中国においてはやくから使われていた道具であり、それが日本に伝えられたとみられよう。それは「わく」が「簞」の字音(ワク)を引き継いでいることから認められよう。ちなみに「杵」は国字であり、「かせ」(かし)は日本において作られた道具であったのだろう。ついでにいうと「杵」も国字である。

中国において「簞」は手で廻して糸を絡めとる道具とも、糸車(いとぐるま、いとくりぐるま)をいったともみられるが、「月夜浜節」や後でとりあげる「かしかき」に使われる「わく」は手持ちのそれである。

同じ長さの木を二本なり四本なり相対させて、その間に横木を入れてささえ、その中心に軸木を装置し回転させながら糸を巻き取るのである。「わくのえ」(わくのゑ)ともよばれたらしい。<sup>(注4)</sup>

それはまた「おだまき」(をだまき・苧環)ともよばれたといわれる(『広辞林』)。とすると、おそらくその機能と形状から日本においてそのように呼称されたのであろう。

「おだまき」(をだまき)は『古今集』に、  
いにしへの倭文(しづ)のをだまきいやしきも良きもさかりはあり  
しものなり(17888)

昔の倭文の苧環ではないが、私のような賤(しず)の男にせよ、やんごとなきお方にせよ、男ざかりはありましたでしょうに。

とうたわれている。「倭文」とは日本風の織物をいう。

『伊勢物語』(三三段)にも、

いにしへの倭文のをだまきくり返し昔を今になすよしもが  
な

昔の倭文の苧環ではないが、くり返し糸を巻き掛けるように、あなたと愛し合った昔を今にとりもどす方法があれば良いのに。  
とみえる。

それらは平安時代にうたわれた歌であるが、室町時代にくだと『義経記』(巻六)には静御前が義経を追討しようとする頼朝の面前で、義経を思いながら、

しづやしづしづのをだまきくり返し昔を今になすよしもが  
な

とうたい舞つたと語られる。「いにしへの倭文のをだまき」が「しづやしづしづのをだまき」と変えてうたわれた。「かせ」(かし)や「わく」「おだまき」(をだまき)はそのように女歌、女踊にとりこまれたのである。

## 2

「かしかき」(かせかけ)は沖縄の代表的な女踊として知られる。手に「かせ」(かし)と「わく」を持ち、糸を巻き掛ける所作をくり返しながら「里」(恋しい人)を待つ女を表現する。

それは紅型の衣裳をまとい、右肩袖を抜き緋の胴衣を見せて踊る華麗さとともに、沖縄の、というよりも日本の舞踊のなかで

も芸術的な高みに昇華した女踊、少なくともその一つであるといえよう。

「かしかき」は次のようにうたわれる。

① ななゆみとはたえん 総掛<sup>かせ</sup>けて置きゆて 里<sup>さと</sup>があかいづ

羽 御衣<sup>みそ</sup>よすらぬ (干瀬節)

七読や二十読のかせ糸を掛けて、あの方のために蜻蛉の羽のような御衣を織り上げたい。<sup>(注5)</sup>

② わくの糸総に くり返し返し 掛けて面影の まさて立ちゆさ (七尺節)

わくに糸かせをくり返し返し巻き掛けていると、あの方の面影がしきりにたち現われて、思いはいつそう増してくる。

③ 総掛<sup>かせ</sup>けて伽<sup>あや</sup>や ならぬものさらめ くり返し返し 思どまさる (ましゆる) (七尺節)

かせをかけても慰めにはならない。くり返し返し糸を掛けながら思いはいつそう増すばかり。

まさしくこれは恋しい人(里)の衣を織り上げようと「かせ」(かし)に糸を掛けつつ思いつのらせ、恋人の訪れを一途に待ち続ける女歌となつていよう。

ただし、これは詠み人のわからない三首の歌をつないで、いわば一首仕立てにまとめたものである。だからそこに微妙なズレや重複があることは否めないが、「里」を待つ女心をうたう

歌としては一貫している。

ところで、石垣島に伝わる「月夜浜節」は「かしかき」を踏まえているといわれる。たしかにこれも「かし」と「わく」を手にして糸を巻き掛け、恋しい人を待つというのであり、歌意の趣旨も所作も似ているといえよう。しかし、また「かしかき」と「月夜浜節」はかなり異なつてもいる。それは歌の表現に明らかであろう。

「かしかき」は女の情念を如実に表現する。歌も「面影のまさて立ちゆさ」「思どまさる」(ましゆる)というように「里」(あの方)への恋情を直叙する。それはいわば「正述心緒」(正に思いを述べる)に近い。

それに対して「月夜浜節」は「木綿かしかきら」といい「しゆてい待ちゆら」とはいうものの情念を直叙してはいない。抑制的である。また、恋しい人の御衣(みそ)を織ろうというのではない。手巾を仕上げて恋人を待とうという。すべてが控えめだといえよう。

そして「月夜浜節」ははじめに「岸ぬ浦」(岸の浦・地名)に木綿を栽培し、みごとに結実した木綿花をうたい、次いでその木綿花を糸に紡ぎ「棹」(かし)に掛けるといふ。さらに織糸となる「総」に目を転じて「指弾き」見上げ、その糸筋の美しさをほめ、手巾を仕上げようという。

つまりこれは手巾を織るまでの労働の工程に即してうたわれている。だからまず木綿花を、次いで「かし」と「わく」を、最後に手巾を持って踊るのである。それだけこれは生活的ある

いは土着的な古形を残しているといえよう。

「かしかき」もこの舞踊が生成する淵源なり過程には布を織るまでの労働とかかわりを持っていたことは想定できるが、それはすでに希薄化して、歌も踊りも女の一途な情念を表現することに傾いている。

とはいえ「月夜浜節」は労働の工程を踏まえてうたっているというだけではない。「月夜浜節」なりの抒情を持ちあわせている。

まず「木綿花」のみごとに咲きほこる風景を白砂の広がる月夜の海浜に重ねてうたっていることに目を向けたい。それは「岸の浦」に広がる綿花畑の情景を比喩的に形容した表現に違いないが、それだけではない。月下に広がる白色の風景。それは恋人をひとり待つ女性のやるせない心象風景を暗示してもいいよう。

むしろその月下の風景が「月夜浜節」の全体の色調となっている。それは紅型の華麗な色調ではない。そして白い木綿糸をかけて、吹けば飛ぶような手巾を織ろうというのである。

「吹かば飛ぶ」という表現にも目をとめたい。これも手巾の実態が吹けば飛ぶようなものというだけではない。そもそもそれは恋しい思いを一途に織り込めた手巾であって、吹けば飛ぶようなものとはいえない。

にもかかわらず「吹かば飛ぶ」とうたうのは、恋人を待つほかない女の、むしろ頼りない自らの存在とやるせない心情を表現している。そんな私がせめても思いを込めた手巾。それが

「吹かば飛ぶ手巾」であろう。

「月夜浜節」はそのように月下の風景や手巾に寄せて女の心情をうたい込む。それはものに寄せて思いを陳べる「寄物陳思」のありように近い。その表現のありようは「かしかき」と異なる。「かしかき」はさきに言ったように、三首の女歌をまとめているのであり、それぞれの歌について分析しなければならぬが、そのありようは「正述心緒」（正に思いを述べる）に近い。その違いは大きい。

くり返して言うと「月夜浜節」は「かしかき」と等しく「かし」（かせ）と「わく」を手にくり返し糸を巻きながら恋の思いをつのらせるのであり、それは「かしかき」と等しいが、その表現のありようにおいて異なっている。あえていうとこれは石垣島において創案されたもう一つの「かしかき」と呼ぶべき女歌、女踊であろう。

なお木綿は一般的にいうと、鎌倉時代に中国、朝鮮から織物として輸入され、その後日本各地で栽培されて普及したといわれている。石垣島でも木綿が栽培されていたのであり、「月夜浜節」はそれを踏まえて作られたのである。

（注1）万葉集歌には「かせ」の他、糸を巻き掛ける道具として「くるべき」や「たたり」もみえる。「くるべき」は、

我妹子に恋ひて乱ればくるべきに掛けて搓らむと我が恋ひ  
そめし（464二）

あなたに恋して心も乱れてしまった。くるべきに乱れた

糸(心)を掛けて繕ろうなどと私は恋しはじめたのだからか。

と。また「たたり」は、

娘子らがうみをのたたり打ち麻掛けうむ時なしに恋ひ渡る

かも(12二九九〇)

おとめたちが績(う)み麻のたたりに麻の苧(お)を掛けて績(う)むように、倦む時もなく、恋しつづけることだ。

とある。

なお「先覚抄」(萬葉集注釋)は万葉の、

かにかくに人は言ふとも織り継がむ我が機物の白き麻衣

(7二一九八)

について、ただし仙覚はこの万葉歌を、

千名にはも人は言ふとも織りつかし我が機物の白麻衣

と訓んでいるが、

麻の布を織り出づることは、麻は種を蒔くよりはじめて、

刈るべき時になりぬれば、これを刈り、からを剥ぎ捨てて、

麻となし、その後にこれを績み、へそ(卷子)に巻き、し

つのおたまくりかへしては、これをつむ(綜)ぎ、かせ

(鹿杖)にかけ、くるへぎ(反転)にかけ、わくにうつし

て後、たて(経)ぬき(緯)といふ物にし、又くだ(管)

になし、さまざまにすれば、ちなに(千名に)名を立つに

たとふ。

という。万葉の時代に「わく」が使われていたか否かわから

ないが、仙覚は麻糸をまず、「へそ」に巻き、次いで「かせ」

「くるべき」「わく」に掛けて後に機にしつらえるというので

ある。むしろ仙覚が生きた鎌倉時代にそのようにしていたの

かもしれない。

(注2)

「説文」は「篋」について「糸を絡むるものなり」(絡糸者也)といい、「篋」について「以って糸を収むるものなり」(所以収糸者也)という。

(注3)

『説文通訓定声』は「篋」は車を曳くものあり、手で転ずるものありと記している(有曳車者 有手轉者)。

(注4)

『倭名類聚抄』は「篋」について「唐韻」に「梃」というと記した後に「和名」に「和久乃江」というといい「篋柄也」と注している。

なお「わく」は『後拾遺集』に「龍門のたきにて」(詞書)とあって、

くる人もなき奥山の瀧のいと水の水のわくにぞまかせたりけ

る(18一〇五五)

とうたわれている。

「かしかき」や「月夜浜節」にいう「ゆみ」(読)は「よみ」

(注5)

のこと。『日本国語大辞典』は「よみ」について「機(はた)の箴(おさ)の数を表すのに用いる。箴の数四十を一よみと

し、その数が多ければ、経(たていと)の本数が多く、織布が密であることがわかる」といい、鎌倉時代に書かれた『名

語記』の「布にいくよみぬのといへる、よみ如何。答、よみ

とは読也。員数をかそふるをよむとなづく。おさの齒四十を

ひとよみとさたむる也。それをよむよみ也」を引く。また、

室町時代に書かれた『文明本節用集』の「升ヨミ布有レ之一

升(ヒトヨミト云ハ)有「糸八十筋」を引く。

『琉歌大観』(鳥袋盛敏)は「読」は「経糸」(かせいと)つ

まりたて糸の「本数の単位を示すもので、まず一本を『片

筋』(カタスヂ)といい、二本を『一葉』(チュファア)とい

い、四葉即ち八本を『一手』（チユテイ）という。一手の十倍即ち八十本が『一読』（チユミ）となる。従って二十読の布はその経糸が千六百本となる」という。そして「本島では二十読が最上の布であった」という。

これは二〇一五年一〇月一〇日宮城学院女子大学音楽館ハンセン記念ホールで催された「八重山の芸能に触れる―琉球大学八重山芸能研究会による公演」において依頼され話した「月夜浜節」の解説に基づいてまとめたものである。